

京
142

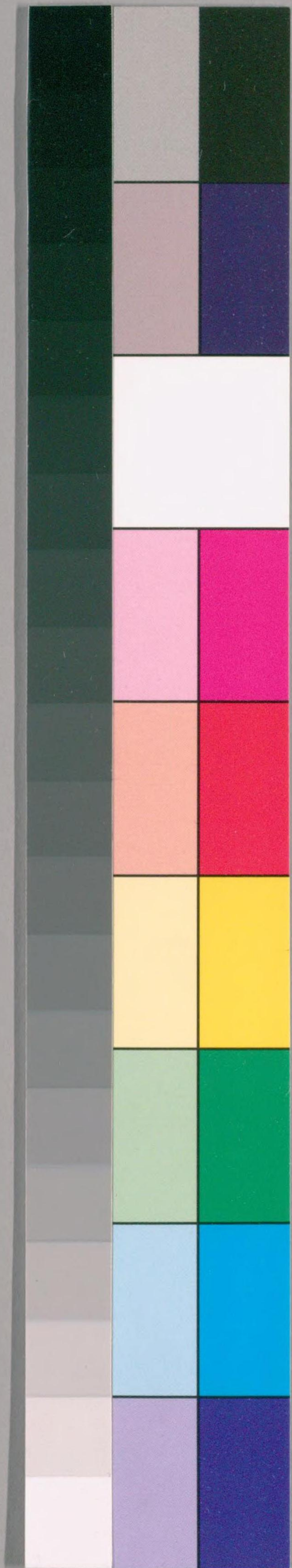
俳諧石車

三
三
三
三

一
二
三
四

東 京 國 書 館				
一	一	五	系	
冊	号	架	函	屬 類

13
8



俳諧石車 一三四
全

石車序

小車の錦かけまぬ色かきしげなや
神國乃かちとそ成ふとしめまし
ん成生れ付ふは是本朝に常也とし
時たふ家都成萬世に鑑と見はを稍乃
花ぬさまのめを同しめは次人の成ふ家
中よ人層あてて此春に物見車とし
俳諧奇仙乃一巻と作て諸國に点者
二十五人よ付墨と願ひうけぬ其成乃



樂レ小レ勢レ夏レハレ有レ次レ先達ハ
北レ公レハレ頭書ヲ取リとレ色道理小
叶レハレ已レ能レ魔レ大レ悪レ人也そレ色レ
祭レ句レ五レ文レ字レナレにレ持レ入レ束レ却レ乃レ宗レ近レ
此レ上レ置レ勞レなレる

○槿ニ黄アあリと白まスる

末ハ也ハ槿小黄而白まるる 似船
僧ハふわるはよ黄の白まる 常牧
時セる槿小黄あると白まる 我黒

蝕ハ東乃あるはよ黄の白まるる 晚山

茵分五言置子の如泉

槿ハ黄の白まるるハ掃なる 言水

云遣ハ付れといふがふよ
ハ具ハハハハハハハハハハ 方山

此句ハ公淮南子と用ある作是なるハ一
こレハ淮南子に所謂日及ハ扶桑也木槿よ色
黄の白まるるハ況ハ扶桑といふはと黄ハ
遠ハ能ク以レ番と見あるは但又此
方ハ助過ハ淮南子ハまるハ後よ色見次



槿よ黄なるふまきよの作はふりきりて此
類の扶桑よ黄なるふまきよ何れは汝云
雨漏天の礫じといふも尚ふるわは汝乳夫子
子貢の能方人事をいふも汝は汝人の遺
揚んよりハ己の退と揚るゝ次

○曲江對雨

杜工部

杜工部甫字
子美

城上春雲覆花墙

江亭晚色静年芳

林花著雨^ツ臙^ツ脂^ツ湿^ツ

水荇牽風翠帶長

龍武新軍深駐輦

芙蓉別殿謾焚香

何時詔此金錢會

暫醉佳人錦瑟傍

東坡 作潤

山谷 作老 臙脂下字蠹魚依之

少游 作嫩 四客置字如此

佛印 作落



○牽牛ケンギョウ



一名金鈴花キンネウ名牽牛花
蔓名狗耳草コウジソウ盆甌草

本此綱目時珍曰近人隱其名爲黑丑クワウ白者爲白丑ハクウ蓋以丑屬牛也金鈴象子形カネツル盆甌狗耳象葉形カネツル云集解恭曰此花似旋花センカ作碧色不黃亦不似藕豆コウヂ宋奭曰花朵如鼓子花コウヂ作碧色日出開晶萎シボムト云今按子有黑白花有紅碧白魚黃者也

○木槿モクギン



又作木堂和名蓋誤其音

一名日及ヒツキ又曰藩籬草ハシ玉蒸花ヒヤク名槿花ヒツキ葵ヒツキ英ヒツキ花ヒツキ奴ヒツキ詩曰顏如葵ヒツキ花ヒツキ即是也

本州綱目時珍曰此花朝開暮落故名日及ヒツキ曰槿ヒツキ猶槿ヒツキ朶ヒツキ一瞬之義也

示雅曰槿木槿ヒツキ觀木槿ヒツキ郭璞註曰別二名也或白ヒツキ曰槿ヒツキ赤ヒツキ曰觀ヒツキ齊魯謂之玉蒸ヒツキ言其美而多也

今按花有赤白二種

○扶桑



一名朱槿ト莊子曰悲朱槿ト是也又曰赤槿ト及ト

本州網自時珍曰扶桑產南方乃木槿別種
二枝柯葉弱葉深綠微瀟如桑其花有紅
黃白三色紅者尤貴呼為朱槿ト云

今按淮南子曰黃白者即是也

今度物見車の作者同一人書セー兩人
徒骨折死れはうひよ何り進上アサリと
点者衆所くよて内談あそこ一々れを
いまは花榴柘火の車鏡磨鉄車をかんと
家よ千人持の石車と俳諧まよことの道よ
掛是よ和歌三神色乗鞍り冷ひ物見車は
跡へ色先へ色屋瓦次落瓦微塵よおろし
ぬ又持牛よ引つきて竹の根鞭とわらわ
時よ新鋏とりの題号の書物よ其根鞭と



かりくー一墓を灰を残りぬ墓原とてなまへー
 先世交ハ其方子とつものけかとも青信ア中
 小も競駈の麻と百草乃事とまろし息頭
 書房ーわく物笑への悪敷茶喰のめよ
 是汰遣ーはる
 点者中

物見車作者
 同頭書人
 素

進上物目録

第一

○月乃斜の紙巻

俳諧の道理とよ子
 句病といふ事



第二

○まゝい事云々案乃花

寝花草を結ぶ花子
 合意句作
 まゝい事



第三

○ 無理を承け付高竹杖

根乃字くち越子
すくいと
通らぬ幸



第四

○ 住居巻くつなりの釣巻

あゝあゝ
あゝあゝ



第五

○ 舞巻の馬帽子高目

同一草の舞巻
ゆはと種を乃異と
りや幸



第六

○ 根軟てんめく馬廻り

打越乃子細かき子ハ
大津の六茶也
まの幸



石車



第七

○果てしなくはげしき

傳りし根えを

人倫いさへし



第八

○競馳乃鹿とて

きこえひらの鹿の角

馳乃

とて



第九

○笑ひ草れ百草一花

競馳と百草とて

鳥とて



第十

○見ん心恥る乃詩歌は拙

愚眼めして諸書と

んぬ者の

後回書



元禄四年 未歲 中秋

難波

松龜軒



俳諧石車

卷二

物見車評判

○發句為長點
△發句不當平句

○脇句不用正花
△脇句用正花

○第三根字不為難
△第三根字非難

○第四不知無謀言
△第四非無俳言

○草舞臺之句見有種々異
○馬廻之句不知打越之惡
△草舞臺之句敢無種々異
△馬廻之句離打越之意

○家櫻之句不知無誹言
○生變之句不知輪廻
△家櫻之句非連歌無俳諧
△生變之句無輪廻意

○競狩之句以為馬或春
○山伏之句犯同字

△競馳之句不知智鹿特
△山伏之句難而非難

○眺望之句不改重煩

△眺望之句多有此格

物見車能諧歌仙 上卷 十二句 評判

三日月乃あのみこ 待久し糸乃くさ

花の房りおる 智年の名を授けり

杖も切竹のしるし 姉乃見侍続

住居と鷹居人 踊るくささき

山を川越ゆえ 秋来てと西陳

草の舞臺の 残賞出す月



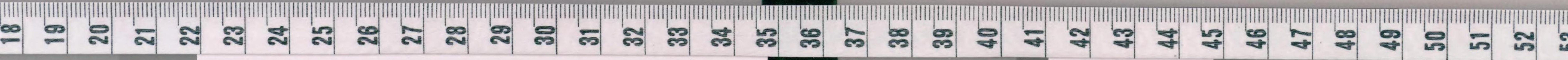
悪どもをへての科也俳諧と歌乃の体あり月科
とはさういふは是も悪也さういふ俳諧の元祖勝乃
山田の住風月長者馬車田舎を去らうめて神祇山の
千白の時たのいささす乃焼るさういふ句をいせ作者
と人介乃沙はせしきさる俳諧してや月月の事をおく
つし海も悪心乃焼見さういふ百倍の科也

又云俳抄に云 寂蓮は俳諧のひらきありまに
いささ物なり一の志かんとつれそる一ま
物成し物すの乃庵なりといはれをいささたのいさ
らゆ成さういさ物とわそ海一ひよらひなすき下の
事也と書つといふ月乃科はさういふことなき悪言也

△又連能の長い評者の中ういにて長短の遠いこと
こもに俳諧の類はさういふことなく上への詠よりま
後撰撰言桶の事とす作者いささ事業はさういふことぬ
とのいさ撰なりきえ八十八の世乃事さういふ一巻毎に
さ遠い事ありはさういさ事代にいと

△又書の評判者いさ
今この俳諧師は二十五人の長巻に批判すき者いさ界にいさ
つす姓名を隠し何者なりとていさ大率に批判せ
し神国に撰にありし和歌三本と胸に竜め偽りさうい
法心と撰に撰せめて事事也いさいさいさいさいさ

見合らういさいさのいさいさ遠いことと和歌さういさかありえ
いさいさ能諧かもの付書いさ評判さういさのいさははていさ
いさ紙をいさ句と長料相違ていさ披見にいさありいさいさ
いさ長掛いさいさいさいさいさいさいさいさいさいさ
いさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさ



花乃房りの乃と棠れ花

調和

氣あかあし
わりのまき

如泉

らあまよ

我黒

わ〜〜〜
あひひ
られはる

言水

常枚

荷分

茎の中乃掃海も
春のありれ物

尙白

一晶

志

舉白

末山

殊重く
三句よう

其角

似船

才磨

梅盛

万海

西吟

旅く指の前よ解す
あ〜〜〜
凡修あひる

晚山

横船

天と〜
酔

周友

又玄

時軒

西鵬

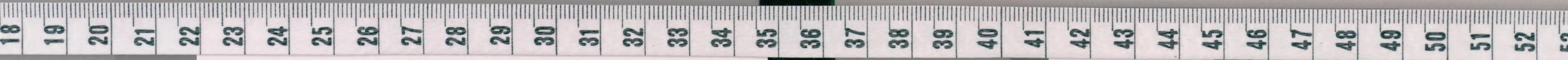
童子野をめぐら〜
あ〜〜
あ〜

作者云

○脇句不用正花

○西鵬鳥の巻乃乃事よ
心乃房りの句 西鵬

脇句にさ〜〜句類も及んず〜
西鵬鳥の巻乃乃事よの心乃房りの句
西鵬鳥の巻乃乃事よの心乃房りの句
西鵬鳥の巻乃乃事よの心乃房りの句
西鵬鳥の巻乃乃事よの心乃房りの句





石車二

石車二



技切竹乃根春行て

其用

志

な根は句作す

言水

晩山

一句の根作すは六のろ
けきしも今午の根
お根の根

横船

帝牧

おまゐるよゝろ
かろん

一鼎

尚白

ゆゑのろ

西吟

一時軒

油根してき常月
かろん

我馬

如泉

孫重

西鵬

方山

根の字は句作す
たろりてはろ
かろん

調和

六翁

園友

荷兮

又玄

万海

竹の根はつま
かろん

梅盛

才磨

一句のろ

舉白

末山

一句のろ
かろん

似船

作者云
○第三根字不為難

△此句乃根のろ字打越の料にすも通字字ら
あしす○料の字の數量也○根乃字の態勢也各別の
事あしすは也



住居と摩屋人のいふこと

西吟 おのゝしるし申す梅かき
らまき作らるる
第1巻

一時軒

尚白

如泉 おまき

荷分 うすうす人のいふ
さういふ
むすうや

又玄

言水 田舎目のすかた

来山

我黒 あま〜〜〜
振〜

晚山

横船

六翁

舉白

其角

團友

調和

志 おまき

一目明

万海 あま〜〜〜

似船

常杖

才磨

西鵬 里に入て海人のいふ者
あま〜の音内ト文字直入

梅盛

方山 能言〜住居といふ
一むね〜

作者

○第四不知無能言

西鵬点の表乃及書

第三 平林

右三百前の巻にあり一巻中

第四 平島

せとあひの字をさういふと

第五 平林

改めらるる事いふらえす

案内たりとむすうといふ



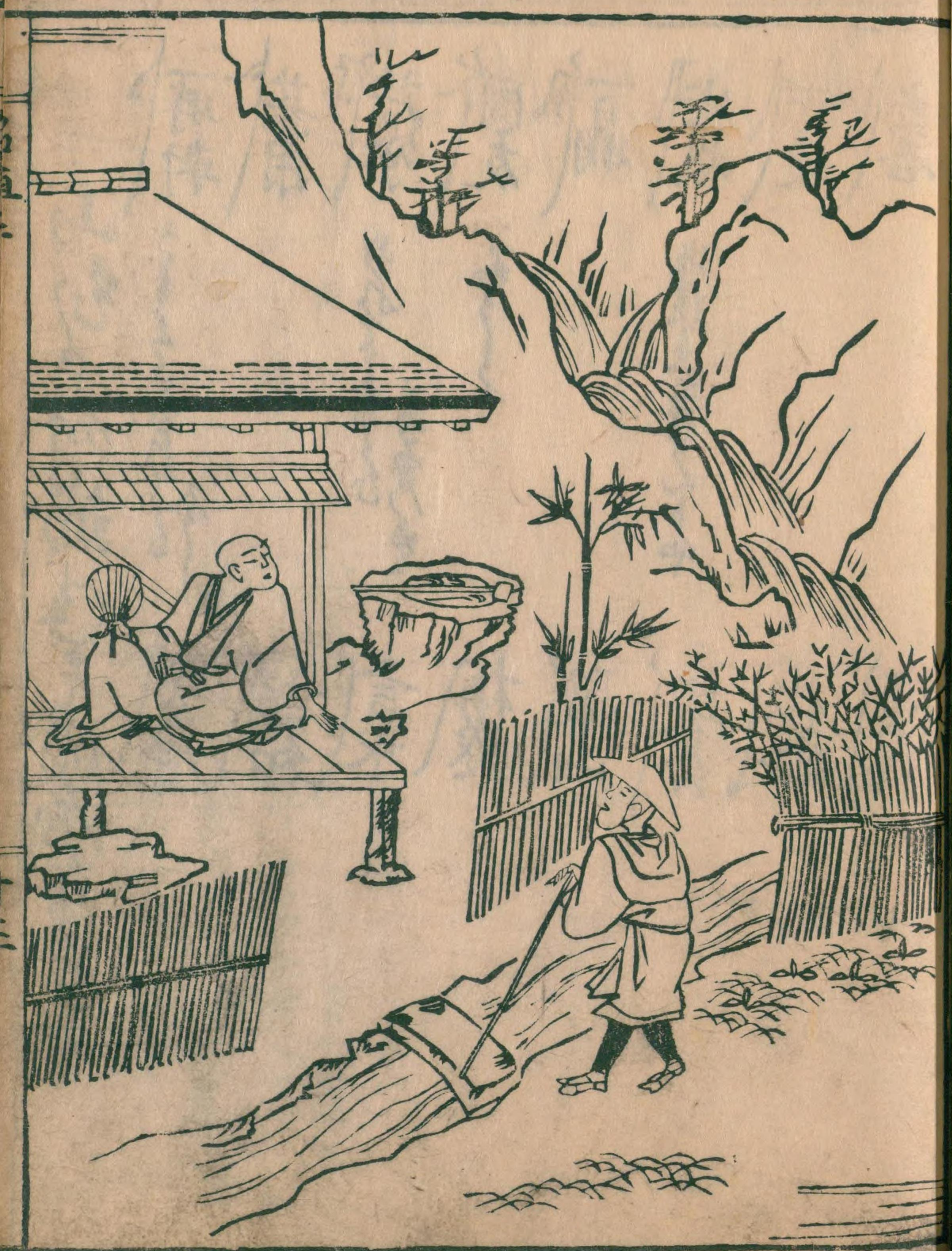
△連歌につくまもあひ ○喜ひはかしのかな

△定家の假名つゝひま ○喜信ヲトナ

△神代の巻乃内子見信 ○喧器音 是ヲトナ

△東福寺虎園中流の額 ○音内 是ヲトナ

○いふ字彙三方七千二百七十五文字とさうしてと喜ひ
は是れ釈迦いこの經文神代雜書より今此諸書にも久
寸孔子の紙文庫人丸乃筆書弘法大師の判刀色乃友
古はてとさうく一人に見えしころす是れは廣く世界
にともない物なり ○作者の自註に軒のむ竹杖に
とくひ西やりの乃らまて付く心とて子供れを西勝は脇
書に置いたてのやえぬ旅人とまきりハ能くうぬぬと
見合す人



山を山越す酒屋がきり

時軒 さきさき 文磨

其角 あはれ 調和

荷兮 あはれ 言水

圓友 あはれ 梅盛

一翫 あはれ 晚山

當投 あはれ 翠白

如泉 あはれ 似船

志 あはれ 六公拜

又玄 あはれ 二山

尚白 あはれ 万海

横船 あはれ 来山

西鵬 あはれ 雲吟

我黒 あはれ 好重

山 あはれ 似船の巻乃及書に

は表にて長にかう居ての脇なりと自註もとて予七回以て
當句難あり見せしるる巻とありと奥と見え居へ
合句何乃難かき二句也是によめて諸國の発明效忠者
二十二人之長短の付黒雲ありにゆ来分とて
鳥句乃指果す心幸推来子とてび交ある能諾の

歌仙一巻十目と掛りては三十五人の批判を見
合園眼よりいふありと耽る事先達乃出歌
とものろくさるし然もいふ点者三十五人の代
能階の海へ息をうせさうらへ何きにてと師通分也
一七七と今引てたを離れす人師永代の院は交
歌仙長歌板行乃巻也仍必件

△乃書乃者に云は句打越る事友に長掛ら介と事付
傍にあやゆりら長長島の荷兮志其用一晶周友
尚白は巻くは以書と用控して平島の似船の巻に
批判と長く事付傍に子細と事交分す人
事の詳に何とて是負は傍と同一事也
如泉の長長なる事いふくら書に長長如何と越
ありて就傍事也や及合にりる事にはと勝ちる
ゆる時長長はして批判すく事也吟味もたぐ
らゆりせに同一句の事いふに事せられ
長者の難也

△打越乃行枝に行歩の通やもの六世不巧者
金徳也すくくはゆ事にあすの山を人越
て酒屋とらゆり事なる乃句なる行歩也
○右の句の意にありあくく物法せしゆり乃
句也ゆは旅人のいひる言事かにいあす事
うく心もあはれ心も味也若南山といふの海は
是ホと勝行乃ゆらうの心通何の用にも事
今也二十五人の月十人の長十人の平長とて
さうりかたも句に板と思ふる

草花採りたるの衣箱がある

調和

晩山

一海

荷分

又玄

一晶

方山

其角

春日乃里の

九川の脈乃半の

梅重く

如泉

尚白

似船

六翁

言水

常放

園友

横船

梅重く

神事終りの

系乃の

時軒

西鵬

九磨

立志

我美

旅役者さ

張芝展覧の

梅盛

舉白

西吟

末山

○草舞臺之句見有種々異

此句の群れに京初園水猿牛に志はさる通也是種々
乃異らるにあり守神事焼木の終乃賜書と西の月
に晩山似船まゝの舟の斗也當句は左の是居廣野の
田島と借地して草山の中は舞臺をけしは一句也



後更一茶坊よりち時雨

不海

才磨

我馬

調和

不玄

似船

常牧

荷々

方山

如泉

周友

横船

一月明

言水

晚山

其角

舉白

西吟

梅盛

志志

来山

六翁

一時軒

尚白

西鵬

一句古流を傳はま
おこ

△は句前乃其流の付あ天地開扉はうゝ系は去塚の
き事也せめて句作るとあり。俳諧の風格よしては
ららう。は打時を偽乃ある世にわ我依り者也
何と見合てとちくれの言に出物さう。是にありて
刺者大う捨長と掛られ。と見ええありさうおえ
誑諧のやうに詠者別る傳拍はなり。同一類傳乃

五車二

十八



長者は句の脇を是に於て遠くおかしき

○時軒ハ能言なり

○米山の 是又よかもの一と云ふ

○西鵬ハ 一句吉流なり此仕と云

三人の批判遠くよと離れ也時に是を吟味して見
合ふ作者註にも吉米よりかく付合ありと云書り
猶ほ西鵬の字あり巧者也何事強志をぬに必ふなり
今時付合うる多し心神もあそむる事あり
是より少の毫角を以て掃蕩し去りて原形も
磨くことあると生翹も吟志し心けき意も原の
人にも心もこゝろもあつらふらむと云書り振はゆ
るもそんたる何と云合はむから仕付し心通
りし心通の秋也

鱧乃皮

鱧

大いん
かりき

赤味噌の汁

鱧のかほやこ

大いんの車切

里芋皮をスミ

冬丸ほり

焼豆腐

今年米代食

若菜拍 赤貝
半房

大いん

焼物塩あそ

引ラ茄子のかう乃拍

酒三駄目のまじり

鱧刺し
一口茄子

毎年ハ料理吟く腹中から何と結する心下ハ心
系の句ハ智恵袋をくちあけて也

△乃書乃者ハ句能言なりハハあすを帰く云分お
一句のねとハ合弁ハ所連ハその心通ハより云これ
又おハ俳諧の句也よく云あすを

解乃石寝子枕まじり撻

調友 珍重

我黒 尚甚きなり

一目明

又玄

志

晚山

如泉

万海

舉白

米山

木磨 極きなり

調和

一時軒

西吟

尚白

横船 絶きなり

言水 珍重

其角

石山 珍重

梅盛

六公丹 珍重

常放

荷分

似船

西眺

△は向高流の付家嫁乃母親解乃とくな。此らつゝ世間
のまね皆是也。まき句に極り二十四人長短の長なり
一時軒一人長長の女下敷とあはれけき先年小相撲の長
はと十九人長長掛一旬と二人長長は十九人見捨一旬
一人長長はまき句のくもくもはもともはもとも評判
とへり解は食候とた書にあ書へり事とて是角魚眼と

姉乃ん心流けありと云航さ

横船

なほつと

来山

六公羽

えまのりー意味
わりのりー

舉白

之志

似船

ともあふ言津にそ
珍重く やさしくこそ

一海

左白風舟の
為世

晚山

一月明

山

けありのつ朝つまのり
珍重く

如泉

又玄

言水

周友

常放

梅盛

けありの夢ひてとちか
けありの朝つとく夢ひ
てまのそくはとちかあり

我思

西吟

調和

一時軒

才磨

荷兮 姉乃字 石的也

其角

尚白

西鵬

今時の娘
珍重 油のさかす

△は句姉乃ん心流けありと云言義が能措乃をこそ
子も是にのりまこと点見も家さるゝあり古代今
に聲も娘と付はハ娘も幸也け姉も娘なれと嬉し
屋を付句なれも家ハ作者さすをさす一と姉と付む
一一句も妹と辨に付まき屋向がれを西鵬も氣ハ
つまここれをも能措の長ハか家ありとつひ乃あり幸



ちりさへ一介れ鳥者といけりあまのこは皆同
 心なすは一言水長の脇書に姉乃ん心流けなりと
 りの言ふと流しひてとの直一けの句をいふ物なる成
 て中さるの句作と據一とあはれ一侍るあひての直一ハ
 西風作の侍さけありあ世乃能辨也
 方山鳥乃脇書にけありとの言ふつゆりてまのまて
 平長掛て流しなり也

○けが書に姉乃ん心流けの句脇書に言水にひとと斗
 筆乃費へ一乃と也是らん心ととるも事也批判乃を
 吟味せし言水にらめて直一と長掛らんあり方山にさ
 めて流しなり也及書の辨判のあはれ競物のみあにさく
 る親と付力とあら一と書事なり也あやう乃辨判乃
 一とあはれいふはれゆん一とあはれいふはれゆん也



踊るの思ふも又たす候なり

以船

志

糸山

園友

如泉

又玄

六翁

其角

晚山

言水

譽白

一時軒

方山

我黒

一晶

横船

調和

一乃海

尚白

荷分

梅盛

西吟

常放

才磨

西勝

多振作なり

△此句終りのあゝと踊るの思ひ付あり踊るつ連
てる例作也聲乃一句迄の吟味の前まで詳判りて女子
居る事とて受てま付る也也て是言ひす〜これ前
にさそゆ〜聲乃を聲と枕ありせよと下の
又女子男の〜言教にあす〜く女言教也
又書に物乃字の意重なるが〜かなぬ好子と詳也

五三

三十三



秋東とて雲陳の町造

六翁

似船

其角

上二
字推

園友

尚白

又玄

舉白

一目明

諧和

梅盛

志

如泉

言水

一時軒

大磨

西鵬

横船

男女の度かて

荷吟

西吟

つきて野蛙も啼く

万海

茶山

好重く

晚山

方山

好重く

我黒

常牧

△は句は巻の厚り句乃らち也何れに付家ありき
不也西陳に名はぬれ多事蹟ありやうに思はせてお
く何れ女も私とさうしていひけまゝに同一事也
乾中少少くらかな志町つてまじ世とてまの業のせし
く衆乃せと月影とて糸採凡切記の系なれを申
く腹の色は確なるおもぬ也

石車二

二二四



後賞出すに月乃さやけき

其南

又玄

荷兮

下のそふ字をさへ

我黒

一目

言水

月の照りしや

横船

甚とん厚幸れ

常牧

西吟

秋高九月乃前の秋高

立志

六翁

才磨

似船

質もたしし多幸れ
布重く 乃ゆき

調和

方山

一海

晚山

梅盛

周友

舉白

一時軒

西鵬

如泉

尚白

来山

作まらぬありし

合句作者より自註に前句行状新し一語合す時より前句
乃ち之をわすれしゆと下書り常通りにしてむ何れや
てと付し合点のなぬもる程なれ作者より前句の
かゝるかなすしとゆきしらうと付終るはと云はれ
しる會候すしとゆきしなすしは前句難句といふ
にあらすと思案せん何事にてと行あるか



付向の百目や二百のあはれをさす事そくし海船の
 質なき心ゆく小筏のふ高のふくもあはれあはれ
 今八九年と吟の通ひあはれもあはれさす事そくし
 寄のふめたることさくし付合をみるあはれさす事
 △尚白鳥乃蜀去に蒲葉分くら越とまねくことか書に
 礎とびはゆへ能諧師あかになくあはれさす事そくし
 牡丹花などの品かきくといわれゆき言案すことえ
 かりき旅の果てさくし何き乃刺者にことあはれさす
 き事にあはれさす事そくし観と時になくあはれさす
 さくし乃あはれさす事そくしあはれさす事そくし
 きく後摘す事そくしあはれさす事そくしあはれさす
 ことあはれさす事そくしあはれさす事そくしあはれさす
 ことあはれさす事そくしあはれさす事そくしあはれさす

物見車能諧歌仙

中巻十二句

評判

親の目よあはれさす 春雨の目もに浦の
 すく見さすこと馬 物ねうす者よ
 春やのん水れ連り 都のつる都の橋
 那智乃藤葉の やしるに文彦
 け娘のつるあはれさす 事そくしあはれさす
 新詠の若草 新詠の若草

三

三

一



親乃目子何も心初寸今并

調和

一目明

舉白

固友

其角

言水

月乃さやけきた
くもあつた

尚白

六云拜

西吟

つらふは孝悌
忠信の心

西鵬

時軒

又玄

横帆

ととあそぶ

常牧

志

東山

如泉

万海

似航

とんちんかたつての
時分りもとるや
大磨

我黒

荷分

方山

晚山

梅盛

△此句親の目ゆと判者れ目よもあはりて心二句也
残の教とまゝに百乃白おけりて心無結師へ行乃後
らまゝにさるる心よ人の目かゝりて付寄れ無後とん
ち一捨長掛らまゝに調和舉白の長鳥の意想れんと
思ふれり心今時の人せらりて煙爇のゆふに火血と
多いさつゆて残の教は抗せらる心け付句も心也

す見るは馬のつら

大磨 あま

西鵬

圓友 ゆゑ

万海 一万の分明

尚白

西吟

似航 血氣勇の者なり
人馬の心

梅盛

常寂

方山

立志

調和

一鼎

晚山

又玄

其角

我黒

舉白

言水

如泉

一時軒

横航 血氣勇

六翁

荷兮

素山

作者云

○馬廻之句不知打越悪

△此句打越に通ふを知らず馬れらに眠りて善い
三句と云ふは自らと云ふ一とゆゆゆゆ
○國友長の巻乃外善い
△と云ふの句 長息也如何の打越も商人の業に掛るは事
と自らあはれけりて尚句入本去の陣取の音字のいゝと云ふ
たり中たえり親ひたりとあるのいゝと云ふを考へん
ふいゝと云ふも脇さりのたえりていゝと云ふを考へん云ふべき

常盤川乃連りるありと

一時軒

荷兮

方山

一海

言水

常牧

園友

横航

舉白

調和

六公拜

梅盛

西鵬

来山

方磨

西吟

又常盤川の別名なり山城や
水野の里にすめり月影を
照す

大井姓也

常盤川乃先陳
我がなりと

東海の大井川

東海乃の別名
孫重 好魚金言の女

孫重く

大井富川の
孫重く

一目明

似航

如泉

尚白

又玄

たしとあき
氣ふら

我黒

其角

晚山

立志

△は句は風申古の能譜斤よの道申金言乃指扇を同じ
水つらら乃違ふ處よき句也是れは川で二千入長短
の鳥句也又長野人の舟中に朝和乃巻斗に長島の人
ゆゑとてた書して孫家梅堂志舉自三人より行た
まゝと書事いふは是朝和の長島とてありや是れ
ふららとてた書とて孫梅盛の老の長島を助航

形意乃藤菴の味淡きなるわ

園友 臨重猶

其角

言水

又玄 句評孫

我黒 言意あつら風流

舉白

一月朋

志志

如泉

西鵬

常板

調和

一時軒

末山 まつとく二句

万海 ろろはるや

梅盛

尚白

晚山

似航 野らものこも
ろろにわ
りてん

西吟 菘菜のまのり
とよ好い

方山 形重く

六翁

荷兮

横航 深泉のあり
まはれ

△は句移りの吟味せん三句目との意打越の委す乃素白
乃馬廻り成川越と付はまけきん藤の二句は結ん
るあり是も又藤菴を乃句流能替もの寸事れ
あゝ三句也馬由りれ句もそそ用のち越乃少は
家にて三句より能の道とす〜はま〜思ふ
倉〜玉味等乃たをま〜ぬ藤菴をの句は思〜



い暇うのまの家の揚

海

又玄

才磨

目くそ初

尚白

西吟

志

舉白

園友

調和

梅盛

其角

采山

横航

似航

一目明

言水

如泉

荷分

我黒

さよめん

六森

晚山

古のますれくまののらま
りかろりてらりつぎ
思ひ對すのりらり

方山

能言うす

常牧

一時軒

能言うす

西鵬

脇にあつては葉のたれも
むのたれもつてを付て
あそつてはあそつて

作者云

○家櫻之句不知無謙言

△は句方山脇書に能言うす
能言うすに松尾句也時よ方山一時軒のけそ乃
村者十二人点と舞らまき十二人の点也い
言うすは句の巻毎に書けり
一時軒のけそ乃
村者十二人点と舞らまき十二人の点也い
言うすは句の巻毎に書けり

石車

三

六



の思ふ事食とてしてして連日廣き事也俳諧よと
 昔乃あは物なほと咽よまぬやうにうめらまて
 吾はとる一悔よとわらふとと取物そと
 △俳諧かよ事と脇書つゝこれぬい事五七乃たては
 つゝぬ事と吟味はかへは法と長くも年志は
 されよとておの食後ほてもたう捨置とて
 見えんるか俳事長者にたてよあは事也

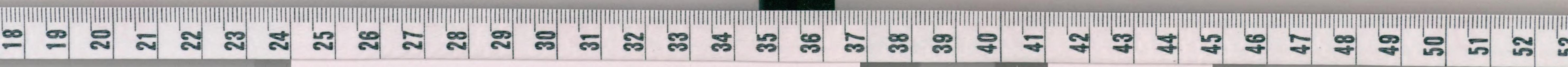
△此も俳諧乃事とて中りく合長ゆへ一平近き
 事とてよます人一むと大佛のほりよまらぬて
 物とるにと系の家つゝまか志男も振元平人
 か志町屋は長くてあはつゝと女用の金持と取交
 目とて蛇の簾乃場老馬とと書名を付け置流か
 あは人々の書物と書す事とて人書よとて

を羽田にせてる鶴と取置よせとてつゝあはつゝ
 介の事乃金後なとて只ひ。お乃とて置人の料
 あへて事と追拂りれは也是に同一とて人
 人の女とてとてはととての事とてすは荒角
 相性よとてけきん是也とて親里へ行くとて海すた
 い俳諧の脇書とて替は事とて一五七のつゝぬ言つ
 みて介乃事とてあはつゝにん捨置はとてあはつゝ
 五七の改め脇の句乃とてあはつゝはうにま付んせ
 けとて又とてあはつゝとてあは事也





石車



新詠くハ着草乃場

我黒

すくまぬ人の心を
梅をかきつゝと

周友

尚白

梅盛

西吟

風景の彫像や
あふこゝそ

又玄

荷兮

常牧

調和

一時軒

似航

たゞみ事の氣も
ゆるぎなきのき
うきこゝそ

六空舟

ゆるぎなき
ゆるぎなき

如泉

万海

其角

来山

之巻

横航

言水

弥重

西鵬

西よなきの草凡んえー
名の草にてあふ夜

一晶

大磨

方山

晚山

興白

△此句前に梅りの相法事ハ氣をとつては賤子付事ハ
念也内法志ハ一思事世を新詠ハ能
句乃あふへまふを分別者の考合と見んえあり
○作者ハ自註にハ句自意註セ下すれは打越の氣味に
同一と書りしハ越ハ張作しハ梅り替りてハと詠
もかハ似し事いとあふ何ぞハハを賤をえりて

人の心象と器用も整心事なり。は句二平五人の長者を
 してきく人打越人のあまに脇あがり。ゆる膝乃圍をた
 うち越ゆる。色は長者の何事とも役にかりて解
 刺し三句目のゆほせと厚とよとらとていもして
 すのうんかの厚食後ハ新詠の句かたみて下也
 △草の者の云也。作者と句。打越の氣味悪あ
 中の眠と前後に引と。西吟巻よかたみて書り。是
 よりいとお羽巻の脇ありに。句の句は。くは。て
 珍ありと思ふ。あをま付らまう。こり。西言す。こり。あ
 是の眼にか。ら。す。や。も。ゆ。は。さ。う。一。玉。事。淺。中。の。志。し
 老ののやう。い。句。よ。ろ。か。ぬ。を。極。して。西。巻。え。い。の
 たる。車。う。ろ。を。や。う。う。○似。航。大。金。草。の。脇。あ。り。持。て。開。き
 て。か。書。の。草。の。の。の。志。は。海。一。事。事。と。や。る。事。新。詠。人。の。名。
 かりて。目。糸。と。志。の。く。事。順。れ。ん。て。ゆ。る。也。

○西鶴島の巻乃乃書に

若草の句無長
 脇を西にあ。う。い。無。名。の。草。也。名。の。草。の。一。て。ま。う。う。う。
 と。や。何。を。無。名。の。草。に。す。志。え。や。草。乃。舞。卷。の。事。に。て。あ
 乃。斬。と。の。か。も。婦。よ。う。き。う。笑。く。

△草の舞卷乃食後前にある者の合身す。心解よりの
 ○真行草 東坡文集曰。直生行行。生草直如。立行
 如行草如走。未有未能立能行。而能走也。是直草ハ字。蘇
 以テ去文章ノ下書リ草案トモ草稿トモ去カカリノ也
 又文章ニ草々トテ早々ノ也。同字ナレトモ字義異ナリ
 一字リ通用セレモ多シ。廣ク字リ學バズレバ詭庭ニ立事
 ナカレ

春雨の目もろくも浦の鮒の如し

西吟

は鮒よりい弄
は鮒

一時軒

荷吟

釣竿鮒の白の翁
辛苦客船西又事

横船

言水

西鵬

常板

似船

其角

連や

来山

之山

梅盛

梅盛

調和

志

晩吟

梅重

一月明

付き

六翁

又玄

浦の鮒湖水の
うい

舉山 梅重

大磨

万海

我黒 梅重

園友

尚白

如泉

△は句の二晶の字に付き... 浦の鮒湖水の
も朝と付む... 湖乃事新...
梅も前句の新報... 若草乃梅...
と隣の子を隣て抱... 隣て抱...
作者狂のや... 長者一人...
す鮒乃湯に碎... 句是也

法了文法汁樂の寄

米山品

万海

方山

梅盛

晚山

舉白

志

西鵬

調和

又玄

其角

六云拜

似航

横航

一時斬

大磨台

言水 珍重

如泉

荷

常寂

尚白

我黒

圓友

一日朋

は向都の橋はけ糸乃寄の付く松尾大明神も湯谷
長まの橋も一山晩山米山是く入長長是法事くも字
の脇たのけきん志れくくも所長掛捨かぬんいんく
ゆえ守ゆえぬえたるの也。作者も自経にくち哉難ま
く唯向まなく一層く志斗も云。年列膝一に橋と
月及び樂の真し酒事も秋末も我をそんす。

石車

三六



才情彩女うあや練の月

調和

才磨

言水

一時軒

其角

梅盛

采山

我思

横航

如泉

西吟

常寂

月明

似航

石山

六公丹

瓊山

荷兮

園友

舉白

尚白

万海

志

又玄

西彫

此句消消をわづらひ物也何の事もなす一とれども一句を
仕まけきて片長掛てとも通る也社よ又ははくぬ
くむ女の悲ひ系りましまるでの付合系名何とね母一母
そおの強世園舎の山鉾乃る。面白くとれうくもたなく
目之通守命也そ縁う平付く序のあり階子雲白
ゆしとて見く序一毛車ひ一連はぬ時乃有と也

追衛の房をと



意持志の業評定

我黒

あまの巻乃らふ

荷々

此句の工

不奇とく

之志

素山

如泉

横航

舉白

万海

方山

尚白

常牧

西鵬

晚山

園友

似航

今と世の相り

又玄

梅盛

一目明

言水

さうやくの乳母の

其角

一時朝

調和

西吟

才磨

六公拜

△此句作者の自註に云源氏物語の心を引いて前句乃女
と美りして付く下の子と云ふ字云おぼせともの自傳と云ふ
と書り物語事乃らふの事と常に行てやてくさるを
用の物語り也下の七文字云おぼせともの自傳と云ふ
を用のいふも也他人を通りに思て病と云ふは
長者達と云ふに應る人の脇に二人と云ふ

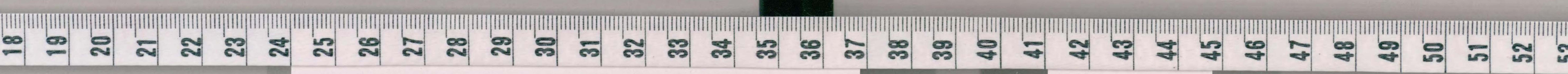
物見車俳諧歌仙

下巻十首

評判

侍かゝるもとと連よ 象を扱ふ扱ふ物く
 人中こそいふ私乃 是らも由來は衣よ
 増む程其のゝ勝 死乃前の念佛象に
 茶も煮火て煮よ 連つゝいきぬを
 山伏のちりつゝい 死流て見守馳を
 ねり方矢つたの 言傳成たれと

三石車



俳諧の又も響は生るる

西鵬 西鵬の形ありては
ゆりやうきまての如

又玄

調和

方山 打歌より通ひて
氣味也

言水

園友 句作ある也

兼山 兼山はつらつと
感冷不斜

梅盛

尚白

似航

如泉

我黒 愚言やうは生るる
りくなく首尾也

常放 つらつと
つらつと

一時軒

万海

晚山 は響るるの事あり
人言はるる也

志

六舟

横航 横航はつらつと
傾城也

荷兮

一白

西吟 と現末の強縁
是也

舉白

其角

大鷹 響忌八舟

作者云

○生響之句不知輪廻

西鵬鳥の巻乃及著に
はるかこの句極と云也

○尚白の句は所より
ち響の氣味
ありて思ふとく
速くはるる也

△句打越はるる句のてなり
け歌仙子紙詰の付句



半一抱きし也

△六翁能女に抱後ありし事むむし系位して
眠静す忠節の者せんせぬくもあし門踊てはる
松を伴ふもとてしん及書たる事

○我六句しして七脇虫なきひめおし朝和兵の巻より
我仙一巻のしちし一旬七脇虫なきひめ十七句し
て脇虫のなきしとて又十六句しけて脇虫のなきぬ
しもの事なき事しし一巻事なき極子と金後と
信しし事なき事しし一巻事なき極子と金後と
去る事なき事しし一巻事なき極子と金後と
い合の事なき事しし一巻事なき極子と金後と

△才唐豆の巻に○雲乃字忘八下直一と普傳禄

孝第忠信 諫議 廉有八八 綱故ニ名也



石車
人中こそ私乃おのづか

河

拾の付

西鵬

一時軒

思ひ

大磨

我黒

末山

尚白

六雲

似航

横航

梅盛

万海

付

如泉

西吟

寄

方山

志

不

言水

又

常牧

困友

一白羽

舉白

晚山

調和

其角

△は向前の申より出て万句なるのいそかりし時の懐紙
物さけけし捨の二句也作者自身註にと全巧のあはる
と書志思せむと捨けし余我にわらうとさる捨句也
○是点四句あり申に一時軒斗の双書に當句打越むら
し某辭と定との處所を味ひ見ゆべしと書付ゆら
我黒行方尚白の助てた書りぬ幸いひに

増むの馬はく勝競馳

方山

一白のえりく競るみえ
馬糸の勝負ありあれ競馳
百平儀車也

調和

急

競馳の百草とあめ事いれ
けは向の競馬にやえり

才磨

競馳直

似航

競馳五月六月に百草掃と
中作らば又競るも競
馳ししを来り

其角

如泉

け向あめ事いれ

常牧

横航

競馬と名競馳しり
さめいしりし向す

言水

競馬直
陸重

西吟

一白のえりく
あつしり

万海

晚山

夕景の五月の

園友

荷兮

しりむひり

梅盛

一目明

基のぬけ

舉白

茶山

一時軒

常牧

又玄

六云羽

我黒

西鵬

一白のえりく
下のえりく何のため
はつありり

作者云

○競狩之句以為馬或其基

△此句作者仕掛物

△此句作者仕掛物といへば一巻の競句評刺の眼也

競馳

○調和馬の巻乃及書に
極上の馬如何は下りきや不知當句上五七の言意はてり競る
中かえりて下の五の字にきりきりしむす事作者の每巧りと思ふ
○競馳コト似航さか山急志の脇をらん馬は五月又月には百草を掃る
堀川百首あやし尋し同之
かきろくしきよすすつけあすらきりきりしりかすすの月と事評

堀川百首

あやし尋し同之
かきろくしきよすすつけあすらきりきりしりかすすの月と事評



山伏乃を刀いししししし月

言水

下巻にくろり月あり
乃きし合筆
夕月あり

尚白

擧白

又玄

圓友

其角

一目

調和

似航

梅盛

万海

志意

西吟

驛路の珍より

如泉

一百の首尾い

方山

いしししの一をきてはま
まきくいしししし

常牧

晚山

お歌のなまれか

一時軒

大磨

六公持

我黒

くろり月降行月

米山

横航

荷兮

西鵬

前句に下の字も
くろり月あり

作者法
○山伏之句把同一字

西鵬鳥の及に

山伏の句くろり合らむれく前にて

△は句前も同字あると見あり一鳥舞くろりとはと見あり
いんてと見あり合と見遠は幸け句よりかきくろり鳥有乃
ゆりあり作者は同字の換へてと合幸悪く

思ふ矢は赤花麻射さうり心

大層言

不舞

西鵬

梅盛

横航

一時軒

朱山

如泉

西吟

黒のまきひうり
二句もそこのりり

舉白

似航

万海

調和

又玄

尚白

園友

一目明

之志

言水

我黒

其角

晚山

常牧

方山 好重く

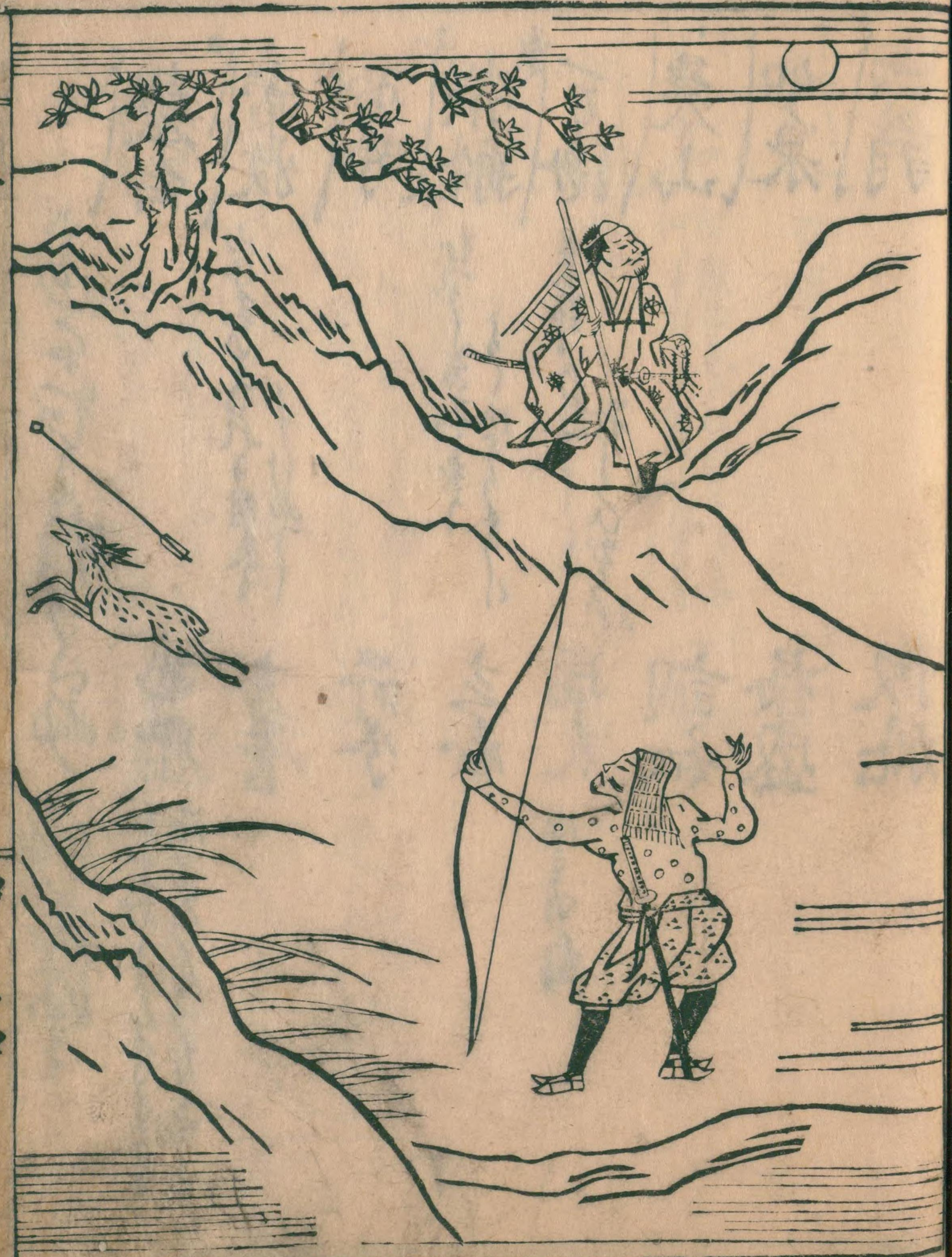
荷兮

比句前の山伏のまきひうりかゝるる月には付あさるく
食後すなはちほまらゝゝ思付句也作者二十五人
の内拾六人を名を九人の拾遺掛らまゝと見へる
やうこの脇をたゞ一〇作者より前にと尚句の類は
付合乃時より前句の何れも思ひも作者なげま
なりと書ると強かき作者さへも思はなげ付く思と云

出た向うは何とて長な家へ一西郷同心かよきつそを
かたれやう程前向に付くはあま

△競馳ハ麻枲の事といふもあつてもは統授家也○競馳ニ
麻ハ古代より打と婦も物かたの二向より麻と佐佐は首
草に好一極めは事気笑ハ草也○は麻の向れ食
を以書せし者の馬脈もんえさ麻管也前の競馳乃
子細あらさしをせめて猫の事と女もし字法をわ
生れ近しまきたる女事迎ふまよひ

△雲鳥の脚去に黒のまきハ物二向よりこのりかす
とまきハ越是ハと鳴人ハありに競馳と吟味して
今麻枲に極度時ハ○まき似船方山ハ著の者百草此事
に極めてまれのハ極な家へ



家おかしな御沙汰

擧白

西鵬

常救

才磨

西吟

荷分

横航

立志

万海

周友

来山

調和

如泉

梅盛

六角

似航

時軒

尚白

言水

又玄

我墨

一白明

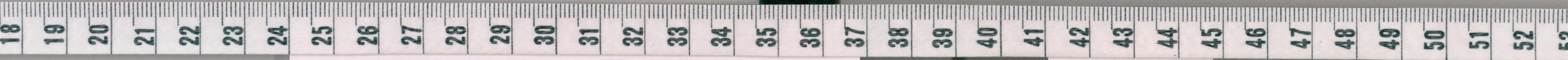
方山

其角

晚山

西鵬の巻乃及書に
我が墨の句はく腸をに見ゆよる巻に
一句の丸もや不白事とらふの巻とらん巻へ

げ句は梅りもの一前句に見合ふ巻はいう事付
家おかしな御沙汰
西吟の巻とらん巻へ
と事ぬらふの作者自註にも吉事といふ事ぬらふ



あて来侍衣に留あしる

断友

真まう

西吟

尚白

梅盛

舉白

似航

うは拾遺よりく似く
幸あつとるる

如泉

一時軒

言水

常牧

我黒

晚山

其心

殊

芥山

六三珠

これとよみ

あうと接あり

石山

才齋

其角

荷号

志

横航

自意中草

調和

百海

一目明

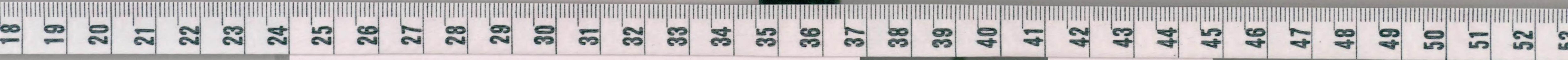
西鵬

盗人の衆
盗三句より

又玄

西鵬鳥の巻乃及書に

あて来侍の句。脇より盗人の衆分盗の衆に二句と鳥の定めて
扱を鳥といふ又玄盗三句の扱分一扱分をひきまて打扱もまうはす
は白鳥のまうを利者西くの鳥ひなれを治す意まて
なり。脇書に盗と扱分と思ひ定めて扱を鳥といふと
つとるる鳥の三つ世界の長者後とられてと西鵬乃鳥に
今うねる也も西鵬にまうとすつとるる鳥の長者なれば通り也



死の前入念佛を打つて

帆航

とらりひらひら肉體のま
ちれまゝくちりくちり

梅盛

一目

調和

如泉

一時軒

園友

言水

常放

万海

舉白

西吟

我黒

六尋

河分

西鵬

あられ海

正念一
去紫不遠

は時をわすれ何もの
らんをわすれ

方山

大藤

塊山

其角

擗航

志志

又玄

朱山

尚白

ひめまきく但く像多
きぬまきく子泣血のまぬ
ふとまきく今あつらひ

は句西鵬脇書に○は時なれん何事もえのふりてこ
まきくると作者の身註にとは通つと書きつるせり
今是れ見合ふ前句に下つと通ひて付合ふとれ
とらりひらひらと幸いふと評判するふの歌道の本
とらりひらひらと幸いふと評判するふの歌道の本

連のめくまぬく松の勝

大鷹

打つて鷹よころり白作
あつたのがす 魁

其角

常牧

一雁の風はあはす
ちひさうぬう

周友

来山

河のちと流と流
わとひよせらき

一目明

舉白

尚白

万海

梅盛

我黒

晚山

方山

西鵬

横航

六角

志

荷分

又玄

西吟

調和

一時軒

似航

言水

如泉

好重く

三句とまゝに白也
好重

△は句前のた乃おの念佛よとくあつて念舟の句也
作者より註乃おとる。いとまよ念舟念舟他
者より細より中より一毎えぬをこれかたつて
あふへ。○西吟脚書にち越この句すとるは
まの字乃吟事といふは。温の字なるへ
今時人の句と温む者あれたまよ連ぬ用ひるは

花添て見ゆ眺を以視なり

言水

調和

常牧

又玄

志

周友

才奮

其角

梅盛

如泉

時軒

似航

六翁

横航

米山

万海

三才のついでに
Tusshakawara

尚白

舉白

我黒

方山

西吟

晚山

一目明

荷兮

西鵬

作者云

○眺望之句不改重煩

○我黒卷の以書に

花添てん眺を 眺むたよりわしく方山西吟のやと同

△は句旅の舟海乃眺む残山の氣又なと見まじく此付る
何の事とたり一是ハ月次の俳諧に効心乃仕捨の句から也
独吟こゝに白の花なれん家一思案して付て連ぬ

きぬらうしを以て俳諧の付せしむるは一南流に付しむる
なる事にはあらず。今十年中執行すべし

△見居眺るの句硯ありて上上の句の中書しむるに
かゝりて五糸の橋乃りけり。時勢もさかきもさかき
そゆへに流はたつてて俳諧の園を遊ぶも
史を乃に無心をゆへに神罰をねえりしと無心を
いふ子細の。見居眺るの句も熱狂書のむすひは
と奉居向のまは海へさかき也

△西吟我思乃山見居眺る乃句は言の脇書しむるに
まゝに思ふとありて又思ふとさかきは外二十二年の
者も通るに思ふ捨られて何別乃事なり

△以書しむる者三人の脇書しむるに
見居眺るの句詩歌に類する見居眺るの句は
古今の書物もさかきなり

劉駕詩云

樹樹樹梢啼曉鶯
夜々々深圃子起

後撰

是列の山乃山也。鳥山の 紀貫之
おまはれさかき秋さかきなり

重言の詩を教へるは、重言は書かすはてとかなし。是を
見居眺るの句もさかき何の事か。鳥山へ入居眺るに
眺るの句もさかき。鳥山へ入居眺るに。世界を
大さかき鳥山へ入居眺るに。鳥山へ入居眺るに。全の前を
見居眺るの句もさかき也



蝶の翩翩
又去
調和
言水
梅盛
我黒
横航

尚白

一晶

園友

其角

志書

志書

尚白

一晶

園友

其角

志書

志書

一時軒
如泉
万海
常牧
西鵬
△は句何のそまとなすけやりに付て一句と瘡瘻
病女の今とあれぬ合井りきりも待風情ぬはまもあぬ
り句がの脈なき連翩翩の二字にて氣も持てたる
ものも是れ世乃る。蝶のあけ句乃果抽のあけ
まもそ見れらるる。自然にと古事あり花よ
蝶と付たりと書り我がのあけらるる幸よて

晚山

西鵬

一時軒

如泉

万海

常牧

京
142

又多れ也長者の暇方つゝもきふを見え居へ一太く二片と
とかな一是能巧の見居居也

△物見車乃力とかなき書の終るも一と物ひん也か居
る石車と引掛かゝるから打枝河で能道産き書を
んせ休居今又和くん西谷の車扱敷也此あゝ此京
都一引付丑束の指筋ちとせ乃道也と地之天追
付産む居一

九禄四辛未歲中秋

京城

上村平右衛門

江府

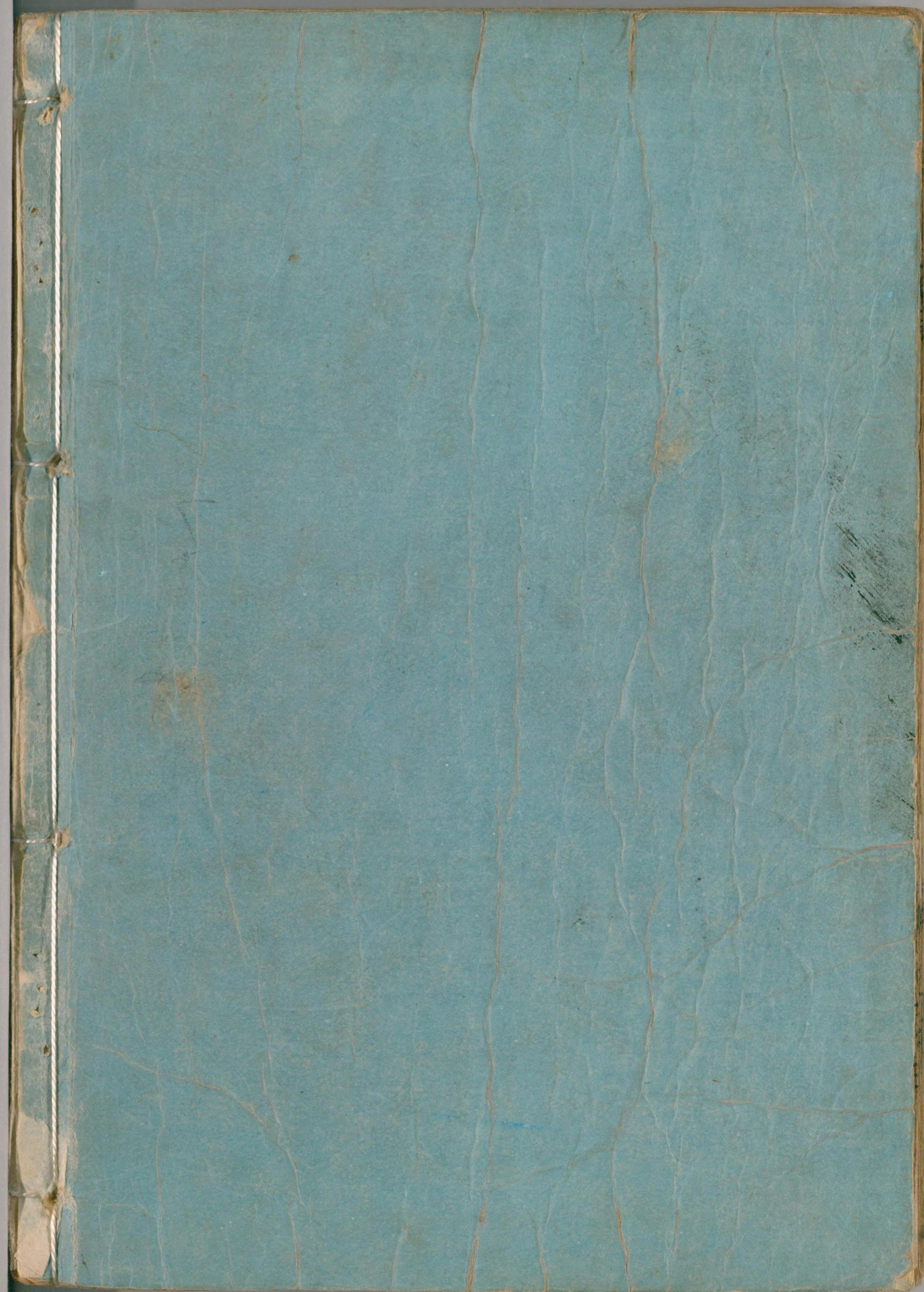
万屋清兵衛

大坂

壽善堂

京東通御旅町
御摺物師
馬場利助





国立国会図書館 タイトル『俳諧石車』 請求記号 寄別13-8

ガラス使用